

≡≡≡支部だより≡≡≡

“調査研究活動の最近の傾向”

—九川支部—

「支部だより」であるから、支部会員全体についての調査研究活動を紹介すべきところだが、初回だよりとして、支部会員の約8割を占める気象官署の会員のものについて、最近5年間の傾向を紹介し、所見の一端を記してみたい。その前にちょっと当管内の研究会開催の現状について触れておく。

当支部刊行の“支部だより”その他で通知しているつもりだが、例年秋に管区気象研究会を学会支部講演会との共催の形で福井市で実施している。これに先立って、三つの地区で地区研究会が開催され、地域色豊かな数多くの論文が発表されるというのが現状である。

ここに紹介する傾向は、地区研究会で発表された論文を対象にしての展望であって、これが調査研究活動のすべてではないことを念のため付記し、管内気象官署の会員が日夜現場業務に精励するかたわらで各種調査研究に取り組み、研究会その他の場で討論を重ね成果の積み上げがなされているという実状を一言伝えておきたい。

さて第1表には、最近5年間に管内官署会員が発表した調査研究論文について、テーマ別題数の推移を示した。5年間で、総数325題（年間平均65題）が報告され、すべて福岡管区研究会誌にそれぞれの概要を集録してある。表によって目につくことは、雨関係のテーマが断然多く、次いで地震火山、解析例、レーダー、風関係の順で多くなっている。雨についての調査が多いことは各管区共通して言えることであり、社会の情報を反映しているとも言えよう。当管内の場合、昭和43年に発足した「梅雨末期集中豪雨特別観測」の5か年計画の実施が刺激になって、昭和44、46年度は約20題/年の多きを数えたとも思われ、またひとつには集中豪雨のテーマで管区要報を刊行したこともあずかっているかもしれない。いずれにしろ、地域特有の重要テーマであることを物語る指数と見ればうなづけることであろう。ちなみに管区別の発表題数の上位テーマを第2表に付記したが、当管区の特徴として地震火山関係の取り上げの多い点が注目

第1表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	計
昭44年	3	21	1	2	2	1	9	1	0	3	0	2	0	6	8	0	2	4	2	3	1	1	72
45	2	14	1	4	1	1	3	1	0	5	2	0	0	4	7	0	2	3	3	3	3	1	60
46	6	18	0	1	1	1	6	0	0	3	4	0	0	4	11	2	4	5	2	1	2	2	73
47	4	14	2	2	1	0	10	2	0	4	0	2	0	1	6	1	1	7	6	4	1	1	69
48	4	10	0	1	1	1	8	0	0	0	0	0	0	0	5	1	2	9	1	4	1	3	51
合計	19	77	4	10	6	4	36	4	0	15	6	4	0	15	37	4	11	28	14	15	8	8	325

1. 風, 2. 雨, 3. 雪, 4. 気温, 5. 霧, 6. 日射, 7. 解析, 8. 高層気象, 9. 数値予報, 10. 気候, 11. 長期予報, 12. 産業気象, 13. 気候誌, 14. 海上気象, 15. 地震, 津波, 火山, 16. 測器, 17. 大気汚染, 18. レーダー, 19. 空港, 20. 災害, 21. 台風, 22. その他

第2表 各管区における上位テーマ

	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位
札幌	雨の調査	風の調査	解析	気温の調査	雪, 地震調査
仙台	雨の調査	海上気象	解析, 長期予報		風の調査
東京	風の調査	大気汚染	解析	雨の調査	地震, レーダー
大阪	雨の調査	解析	風の調査	地震, 大気汚染	雪の調査
福岡	雨の調査	地震, 火山	解析	レーダー	風の調査

され、地域社会のニーズにも大摺みにみて関係がありそうである。

要約すれば、調査研究活動が地域社会のニーズにもよく順応するという、現場技術・業務への密着度の強さがかがえる。ということは、研究会で発表される数多くの成果を、どうすれば実地業務に生かして事業の発展向上に振り向けることができるかを大胆に思考し、手だて

を加える必要があると思われる。性急な仕方ではむづかしいかもしれないが、例えば毎年各管区で開催される研究会を、単なる論文発表会に終らせないで、各種技術検討会（とくに予報技術検討会）、研究会とのかみ合わせを考慮するなど、業務と調査研究とのより密な接触工作が要求される情勢にあると言えよう。

（長田英二）